A MAGAZINE FOR THE HARP PLAYER

HARP LIFE

12
2018

ハープと皆様を繋げる
オンリー・ハープなフリーペーパー

THIRD ISSUE
Vol.3

DIVA PLATINUM

My Harp, My Life 私の楽器

正しい弾き方で弾いてやらないと大きな音が出ない。むしろイリスに近い音だと。いつしか、ミネルヴァよりもむしろエレクトラの方が音の表情が付け易く感じ、音色も好みになっていた。エレクトラと青春時代を過ごし、慣れ親しみ、音を遠くへ届ける努力と技術を磨いたことが、エレクトラを育て、結果自分も育てられていた。他のハープには、もう目移りできなくなっていたという。当時サルヴィも幾つかニューモデルを出し始めており、今のラインアップに近い、性能がアップしたハープもあったはずだ。しかし、巡り合わせが眠っていたハープと松本さんを結び付け、今も最高のパートナーとして、お互いを必要としている。エレクトラとの出会いこそ、松本さんの天命だったのだろう。

松本 花奈

『エレクトラ』

天命を知ると言うべきか。松本花奈さんが出会ったハープは、1975年製サルヴィ・エレクトラだった。サルヴィの創立者ヴィクトール・サルヴィが手塩にかけた一台で、ミネルヴァのひと世代前のフラグシップ・モデルだ。

武蔵野音大の練習室に、ダイアナが置いてあった。角度や弾き方によって音色が変わるサルヴィ製ハープの奥深さにすっかり魅了された学生当時の松本さんは、サルヴィの程度の良い一台を探し回っていたところ、中野（旧姓：小倉）智香子氏が使っていなかったエレクトラを譲り受けることになる。倉庫に眠っていて、暫し音を存分に出し切っていなかったハープ。手にした最初のうちは、「（音が）鳴らな〜い」とこぼす毎日。じゃじゃ馬を手なずけるがごとく、辛抱強く対峙した。その後、キャリアを順調に積み、CD「ベラノッテ」をリリースした頃に、ミネルヴァも購入した。松本さんは2台並べてみることで、エレクトラの実力に改めて気付かされた。エレクトラは、ミネルヴァよりこもった音がする。ミネルヴァ以降のハープは、むしろコンサート会場用途を狙い、音が外に出てゆく造りだが、エレクトラは

EVENT SQUARE イベント・スクエア

- 11/9 有馬律子 東京・パルテノン多摩 小ホール
- 11/10 石﨑千枝子 レバーハープアンサンブル 東京建物八重洲ホール
- 11/16 吉野直子 他 東京文化会館
- 11/23 中村愛、池山由香 他「2つの竪琴」オランピアモーニングコンサート 東京オペラシティ3階・近江楽堂
- 11/27 ソフィア・キプルスカヤ ハープ・リサイタル 東京・日経ホール
- 11/30 マリー=ピエール・ラングラメ（ハープ）、エマニュエル・パユ（フルート）＆リーズ・ベルトー（ヴィオラ） 東京・王子ホール
- 12/18 高野麗音 東京オペラシティリサイタルホール
- 12/20 吉田みちこ 近藤孝憲（フルート） 相模原市民会館ホール

The Last Chorus

●銀座十字屋セール情報、その他

12月7、8日に、東京・銀座十字屋ハープ＆フルートサロンにて、ハープ・フェアが開催されます。銀座十字屋オンラインショップでも、年末年始恒例の福袋セールを予定。お年玉ご褒美はこれで決まり!また、銀座十字屋ではハープをモチーフとした文具の新商品を近々リリースいたします。お楽しみに。

●GTF会員講師募集中

銀座十字屋では、各地のハープ講師や教室運営をされている皆様が、情報交換やお得な各種サポートを受けられるコミュニティ・サービス「GTF（銀座十字屋ティーチャーズ・フォーラム）」を開設、引き続き講師の皆様の参加を募っております。また、GTFの各地提携教室と講師の情報は、銀座十字屋HPに掲載されていますので、お気軽にお立ち寄りください。

○銀座十字屋HP　http://www.ginzajujiya.com/

情報寄稿先：harplife@ginzajujiya.com　発行人/倉田恭伸　編集人/森　泰義

年末年始
特別
インタビュー

サルヴィハープス総帥

マルコ・サルヴィに訊く

The Harp World According to Marco Salvi

ハープの世界シェアでいえば、グループ合わせて
8割に及ぶと云われるサルヴィハープス。
同社を牽引する二代目マルコ・サルヴィ氏が来日し、
本誌のインタビューに応じてくれた。

—以前からお聞きしたいと思っていましたが、サルヴィ社は、なぜライバルだったライオン＆ヒーリーを買収したのでしょうか。

マルコ：1987年私の亡父が好敵手の会社を買収した際は、世間を驚かせたものです。1889年以来、ライオン＆ヒーリー社はハープを作り続け、存続を望んでいましたが、経営的にはあまりにも不透明な未来に直面していたのです。当社は熟考しました。ハープ界の活力を維持するためには、音楽家が楽器を選択できる環境が必要だと。同業者として、ハープを作り続けたいという彼らの気概は十分に理解できます。そこで、ライバル会社存続のためにはあえて吸収合併するのではなく、両社は「異なる生産プロセスを持つ異なるブランド」であると考え、我々はそのバランスを保つ決定を下したのです。

—最近、デルタやレウス49といったエレクトリックハープをリリースしていますが、何か意図があるのでしょうか。

マルコ：その通り。我々は通常のハープの生産を続ける一方で、常に新しい世代にアピールする楽器を開発し、一般へのハープに対する関心を育てることも重要と考えているのです。デルタは、洗練されたハープの形をした最新の楽器であり、そのデザインとストリングスの範囲によって、従来とは全く異なる音楽アプローチと新たな顧客へのアクセスを可能にしました。レウス49は、4年間の研究開発を経て、全体的にハープの寸法を増やすことができました。やはり、時代のニーズは刻々と変化するのです。これらの革新的な楽器は、ハープへの関心を集め、可能性を拡大してくれるものと信じています。

—あなたの目から見て、日本のハープ市場というのは、どう映っていますか?

マルコ：来日するたびに、日本におけるハープへの関心が徐々に高まっているのを大変嬉しく思います。熱心なファンとそれに応える顧客本位のサービスとで、支えられているのですね。お世辞ではないのですが、たとえば銀座十字屋にしても、いくらハープ専門店とはいえ、自前でコンサートを開催し、教室を運営し、それを支える講師の皆様向けのフォーラム（GTF）を立ち上げ、隔月ペースで「ハープライフ」まで発行するなんて（笑）!

—来年にむけて、何か新しい動きや予定された活動などがあれば、お聞かせください。

マルコ：サルヴィ・ハープスは楽器を作り続けるのが本懐です。ですが、「どのようにしたら、より良い成果を得ることができるか」だけを、常に自問自答しています。抱負を問われて大風呂敷を広げることは簡単ですが、私たちは可能な限り最高の製品と顧客サービスを提供することしか考えておりません。そのためにはお客様の声を聞き、お客様と交流する必要性を感じています。先ほどのデルタやレウス49なども予定調和で出来上がったものではなく、何よりもお客様の声の反映だったに過ぎないのです。未来についてひとつだけ申し述べることができるのなら、父の代から続けてきたいつもの作業とそれがもたらす結果が、明日はさらに良くなり、ハープそのものが今より良い性能を持てるよう、日々精進することをお約束するだけです。

ある意味、快い裏切りがあった。二代目のマルコ・サルヴィ氏は、職人であった創業者の父ヴィクトールとは違い、金融関連の仕事で成功したやり手で、亡父の遺志を継いでサルヴィ社のトップに就いた。新しもの好きで、合理的で、どこか淡々とした印象を受けていた。ところが、息子は父の仕事を畏敬し、職人の技と心意気を尊び、何よりハープ愛に溢れた人だった。どの世界でも継承は難しい。まして、多くの職人たちを抱える世界は、むしろサルヴィ氏のように、歴史や経緯を懐に納め、バランス感覚で差配できる経営者だからこそ務まるのかも。大言壮語を吐かないからこそ、反って今後の同社に期待が持てた。

LET'S TRY!

世界の主要ハープ・コンクール

いまをときめくスター・ハーピストたちも、皆様と同じように、当然ながら〝青の時代〟がありました。「いったい自分の実力というのは、どれくらいなのだろう」「プロとしてやっていきたいが、果たして務まるのだろうか」…色々な想いを重ねながら、様々な壁に挑んだはずです。その最初の壁のひとつが、コンクールといえるでしょう。練習の成果と才能の有無を、他者と比べられることで初めて知る。自己満足から客観的評価へ、厳しい現実と容赦のない批評があなたを包み込みます。しかし、その壁を乗り越えた時には、溢れんばかりの拍手と栄光が待ち受けているのも事実。つまり、どの世界でも同じですが、コンクールという壁は試練の場であると同時に、世界に自分を認められるための登竜門でもあります。ではハープの世界には、どのようなコンクールがあるのでしょうか。

Photo courtesy of USA International Harp Competition,
Lily Laskine International Harpe Competition, Naoko Yoshino HP, Sony Classical Records

「世界三大ハープコンクール」とは?

諸説ありますが、その開催規模・歴史などから、次の3つが一般的に「世界三大ハープコンクール」と称されているようです。

リリー・ラスキーヌ国際ハープコンクール

フランスで女性初となるオペラ座への入団を始め、ハープへの偉大な献身で、いまもパリ市民の敬愛を集めて止まないラスキーヌの名を冠したコンクールです。パリで3年ごとに開催され、次回2020年に開催されれば9回目となります。優勝者には、直近ではサルヴィハープの授与、2位は7,000ユーロの賞金が与えられました。比較的歴史は浅いものの、権威があるのは、歴代の優勝・入賞者たちが、ほぼ次代のスターになっている実績でしょう。1999年大会の優勝者は、カトリン・フィンチ。ジュニアの優勝者が、ヴァヴァラ・イワノバ。2005年は、アンネレーン・レナエルツなど、そうそうたる名が連なります。また、この大会は何かと日本人もゆかりが深いのです。まず2008年は、優勝該当者がいなかったものの、2位のマクシミリアン・マドックス賞受賞者が景山梨乃でした。そして、なんと同年佳作で4位入賞したのが、超絶技巧で鳴るサーシャ・ボルダチョフだったのです。2011年には、遂に日本人初の優勝を山宮るり子が飾り、ジュニア部門も樋口菜穂が制しました。

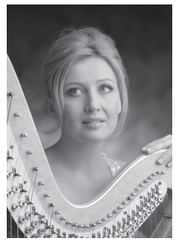
▲勝者だけの檜舞台。オケをバックに模範演奏に臨む景山梨乃

▲4位に付けた、まだ若き日のサーシャ・ボルダチョフ

USA国際ハープコンクール

1989年に、奏者としても教育者としても名高いスーザン・マクドナルドによって始められました。そのため、今も彼女が教鞭を執ってきたインディアナ大学内にあるジェイコブズ音楽院で開催されています。やはり、3年ごとの開催です。優勝者には、ライオン&ヒーリーのコンサートハープ、2位は5,000ドルという実績があります。アメリカではその国土の広さゆえに、国際音楽コンクール世界連盟主催の7つのコンクールがありますが、その頂点に立つコンクールといえます。また、タフなコンペとしても知られ、前回入賞に甘んじ、次回でリベンジ優勝というパターンを踏んだのが、ヤナ・ボウシュコヴァとグザヴィエ・ドゥ・メストレ。今や男女の世界トップクラスですね。エマニュエル・セイソン、レミー・ヴァン=ケステレンといった次代のスターたちも優勝経験者です。日本人に未だ覇者はいませんが、2010年に景山梨乃が2位、2007年大会では2位と5-7位を日本人が占めるという快挙も成し遂げています。

▲USA国際ハープ・コンクールを創設した当時のスーザン・マクドナルド女史



▲前年は入賞に終わるも翌年にリベンジ優勝を果たしたヤナ・ボウシュコヴァ

▲今や第一人者となったグザヴィエ・ドゥ・メストレも、前回の雪辱から優勝を飾ったひとり

イスラエル国際ハープコンクール

今年で20回を迎えた伝統あるコンクールです。イスラエルは、ダビデ王の時代から現代に至るまでハープを演奏・継承してきたユダヤ文化を背景にしているせいか、国や開催市をあげてバックアップしている〝熱いコンクール〟といえるでしょう。優勝者にライオン&ヒーリーのハープ、次席に8,000ドルの賞金などが与えられた実績があります。そして輩出した優勝者らがトップ演奏者として活躍している多さでも、他の追従を許しません。ナンシー・アレン、アリス・ジャイルス、イザベル・モレッティ、マリー・ピエール・ラングラメ、ヴァヴァラ・イワノバらがおり、そして何と言っても1985年第9回大会で日本の吉野直子が最年少優勝し、日本でもお馴染みのコンクールとなりました。また、第17回大会には千田悦子が、第18回大会では福井麻衣が、それぞれ3位入賞を果たしました。コンクールでは、副賞として優勝者が記念コンサートを開く権利やCDの吹き込み等の余禄もあり、ここで得た自信からスター・ハーピストへ羽化してゆく奏者も多いのです。

▲ハープのメジャー・コンペで、しかも当時最年少優勝を飾ったことで、われらが吉野直子も一気に国際的スターダムへ

LET'S TRY!

世界の主要ハープ・コンクール

まだある注目の有力コンクール

Main harp contest of the world

世界には他にも有力視されるコンクールがたくさんあります。いくつかご紹介しましょう。

まずは、サンクトペテルブルグ国際コンクール。別名「ゴールデン・ハープ」と呼ばれています。ロシアでは初代皇帝ピョートル1世が音楽を普及させ、その娘エリザベータがハープを愛した史実から、この伝統を街へ甦らせようと市議会や文化省も加わり、2009年からスタートさせましたが、これが実力本位の本格的コンテストと評判になりつつあります。ソロ、オケとの協演、総合的音楽性まで審査の対象で、次世代コンクールのひとつとして注目されています。

次に、国際コンクール「ハープの響き」(「Suoni D'Arpa」)です。イタリアのサルッツォで行われるイタリアハープ協会主催のコンクールで、今年で第8回を迎えました。イタリアは、サルヴィハープスの御膝下でもあり、会場の近くにはアルパ・ヴィクトール・サルヴィ美術館もあります。最終選考において、イタリア人作曲家による作品を演奏することが課せられるのが、ユニークです。

最後に、ジュネーヴ国際コンクール。こちらは、権威も歴史も申し分ないコンクールですが、ハープ部門のコンペが行われるのは極めて不定期です。永世中立国というスイスという土地柄、ヨーロッパは元よりロシアなどからも音楽家が居住・留学をしており、多くの才能を輩出しているコンペです。いずれのコンクールも全世界からエントリーを受けつけており、年齢制限も概ね30−32歳くらいまでのようで、最近は中国やアジア勢のエントリーがどこのコンクールでも目立つようです。日本人もかつては大旋風を巻き起こしていましたし、アマチュアの実力は西洋と東洋は紙一重とも云われます。日々の鍛練の成果を問う意味でも、あなたもエントリーしてみてはいかがですか?

季節のおすすめハープ Vol.3

季節ごとに、毎号1台ずつ
銀座十字屋がおすすめする、
素敵なサルヴィハープ。
今回は「オーロラ」です。

存在感のある支柱は、大胆かつ優雅。

その支柱のデザインは、その名のとおり、まさに夜の帳(とばり)に降り注いだ天空のオーロラのよう。シンプルで、どこか気品を漂わせるサルヴィ・オーロラは、幾多の個性的なラインアップを誇るコンサート・グランドハープのシリーズの中でも、屈指のロングセラー・モデルとなっています。

一言でいえば、定番の魅力。ロングセラーであり続けるのは、理由があるのです。それはけっして無難なとか、平均的にという括りではなく、安定感とトータル・バランスの良さ、そしてハープらしい、まろやかで温かな音色とクリアで綺麗な高音の冴え…こうした特長が、このモデルの人気を支えているのです。存在感のある支柱は、大胆かつ優雅。そのままオーロラの飽きのこないフォルムの重要な構成要素となります。フィエンメ渓谷から伐り出した赤いモミの木で作られた55cmの鳴りのいい音響箱に深みを与え、弦の振動をマイルドな音色へと換えていくのです。カラー・バリエーションは、マホガニー、ウォルナット、ナチュラルメイプル、エボニーの4色が用意されています。とりわけエボニー(黒色)の登場は、発売当初にハープ・ファンの度肝を抜きました。黒檀のような、高貴な出で立ち。ピアノでは当たり前のカラバリは、未だハープの世界ではむしろ希少だったのです。ゴールド全盛のエクステンションのなかで、使い方によっては下卑た印象を与えかねない両刃の剣=黒いボディに、「エレガンス」という評価軸を与えたことは、オーロラの誇るべき功績といっても差し支えないでしょう。どなたでも安心して手にすることができる逸品、それがオーロラなのです。

Aurora

オーロラ

越境してゆく音楽と共に《後篇》

魅惑のレバーハープの世界

ケルト音楽だけに留まらず、いま音楽シーン全体が
ノン・ジャンル化している傾向があるようです。
厳密にいえば、いままで無理にジャンルの枠へ押し込められていたものが、
堰を切ったように自由度をアピールするようになってきたということです。

むしろレッテルを貼らないほうが幸せな音楽もたくさん存在し、インターネットの発達による検索文化に乗じて独自の音楽スタイルを掲げ、マス広告よりも口コミ効果でスターダムに昇り詰める例もあります。演奏上でも過去にはあまり考えられなかった楽器の組み合わせやジャンルを超越した音楽家間の交流も進み、音楽の世界はいま確実に越境化しています。

ハープでは小型化・電子化してゆくことで、その波に乗ろうとしています。身びいきではないですが、最近アンサンブルやバンドの中に、レバーハープやラップハープが登場し、エレクトリック・ハープを携える演奏家を多く散見するようになりました。さすがにグランドハープは変化ないだろうと思いしや、オランダではレミー・ヴァン=ケステレンのコンサートが、それこそ数千人規模の会場での演奏が当たり前になってきたため、それに対応するハープをサルヴィがオランダとレウス49（前号の表紙ご参照）を共同開発しました。そしてレウス49もプラグインできるハープ、つまり電子化装備がなされているのです。

一方で小型化の兆しは、前号で言及した狭い日本の住宅事情の他に、ますます高まるアコースティック化・セグメント化とリンクしている可能性が高いでしょう。かつてMTVが始めたアンプラグドという試みは、その起点となりました。電子楽器を排除した生演奏の場という、アーティストにとっては試練の場であるけれども、その分メッセージが直に届きやすく、演奏にも親近感を覚えやすい特長があり、多くのスターたちが試みました。もっとレアな音楽が聴きたい／演奏したいという積年の想いが、次第に演奏者たちを「自分の音楽が分かる人に届けばいい、共感できる人と音楽をシェアしたい」という行動へと駆り立て、余計メガヒットが生まれにくくなる状況が生まれたわけです。先述の音楽の越境化、アコースティック楽器への回帰、メッセージ性の増幅、シンプルさの希求などは、こうした志向と繋がっているようです。そんな流れの中で、レバーハープやさらにコンパクトなラップハープは、比較的習得しやすく、素朴で美しい音、そしてハンディな利便性などから、かなりこれからの傾向にフィットしてくる可能性が高いのです。事実、ライブの場で見かけるようになったレバーハープ奏者たちは、その音楽性にも左右されますが、曲によっては、ハープと共にヴォイスや歌を挟んでくる傾向が今のトレンドです。音楽的な括りだけでなく、楽器がよりハンディになって、求める音がよりシンプルになり、その上でリアルなメッセージを届けたいと思った時、人が声を武器に使うのは自然な流れだと思います。かつて木村弓がライアーを抱え「いつも何度でも」を歌ったようなシーンも、もはや目新しいものではありません。ライブで詩の朗読が復活しているのも、これと同じ傾向です。歌い手の傍らには、小振りで、しかも良い音が出て、ステージ映えするコンパクトハープが抱えられている…こういう光景が、当たり前になっている時代が来るのかも知れません。

憧れから現実までの最短距離のハープは、MIAとJUNOです。

付属している脚を付けて演奏もでき、別売りのハーネスもあります。
また、レンタルのサービスもあるのが嬉しいかぎり。
サルヴィが制作に妥協を許さない姿勢を、このクラスのハープにも貫いているのが頼もしく、
ディテールはレギュラークラスのレバーハープに引けを取りません。
入門用の用途の他に、大人にはポータブルなサブ・ハープとしても重宝します。
小さいながら夢が大きく響くハープとして、ぜひおすすめします。

サーシャ・ボルタチョフ
オン・JUNO25

Harp Caravan

ハープ・キャラバン第3回

和装ハーピスト 綾

ハープが輝いている街／ハーピストたちを訪問するハープ・キャラバン第3回目は、和装ハーピストの綾さんだ。着物をまとってハープを弾く音楽家である。折々に着物でステージに上がった奏者はこれまでもいた。しかし、一貫して着物で通すばかりか、音楽性に関しても「和装」に徹するハープ奏者というのは、恐らく初めてではないか。無論、当初は綾さんも西洋のクラシックに親しみハープを手にした。しかし、演奏活動を続けるうち、自分が真に表現したいものは何なのだろうと思い始める。自問自答して内観を問うと、日本人として歴史や文化に興味があり、それらを愛して止まないハープで表現したいという答えに行き着いた。綾さんは、抱いた疑問に対し一旦立ち止まって考えることで、ハープの新たな表現領域を得たといえる。

考えてみれば、ハープは竪琴である。かつて「ビルマの竪琴」という映画から、ハープという意識が顕在化したが、正倉院のお宝の中には箜篌（くご）というシルクロード伝来のハープの原型が収められていたことはすでに判っている。日本人は、何もハープ=西洋の楽器と位置付ける必要もなく、実は「私たちもハープ=竪琴を長らく弾いてきた」という誇りこそが、実は最も欠落する要素なのかもしれない。和琴では着物をまとって弾くのなら、竪琴であるハープも着物をまとって演奏されることは、何らおかしいことではない。ましてあらゆる方面で、伝統が消えてゆく現状を見つめていた綾さんが、ハープと着物を結び付けるのに、そう時間はかからなかった。

活動を本格化させて1年経ち、その成果を11月9日に名古屋市熱田文化小劇場で問う。デビュー1周年記念リサイタルは、二部構成。当日は同時にCDもリリースされるという。日本唱歌も交えるものの、ほとんどがオリジナル曲という意欲的な内容で、特に第二部では小野小町を採り上げ、いにしえに存在した薄幸の伝説の美女に想いを馳せ、現代の視点から自らしたためた台本の朗読も交えて、平安女性の一生を謳い上げてゆく。当日はなんと十二単を着てハープの演奏にも挑むという。なぜ、そこまで着物にこだわるのだろうか。

「私の演奏活動を聞いて、大切な御着物を譲って下さる方も出てこられたのです。様々な理由でしまわれていた着物の思いを受け継ぎ、伝えてゆくのも私の役目。また、着物は日本の伝統そのものを、自身がまとうことが出来るもので、着物でステージが上がれることをたいへんうれしく思います」。着物によって、演奏上の不自由も生じるかと思うが、「ペダル操作が大変でした（笑）。しかし、毎日着物をまとうことで身体になじみ、着物の声をきちんと聞くことで、だんだんと思ったように身体が動くようになりました」と、意に介さない。今では、演奏会場へ着物を召して参加されるファンも珍しくなくなったという。着物を着てゆく理由がないなら、着て行ける場を作ればいい。こうした発想が、新たにハープの聴衆や関心を生み、従来のハープ・ファンには、和をテーマにした音楽コンセプトで温故知新の耳目を引く。グローバリズムという言葉が横行して久しいが、翻って私たちは日本人であることの意義を日々問い直しているだろうか。外国からの観光客や、コンビニの店員さんに外国人が増え、〝日本語の上手い外人さん〟が多くなったと喜んでいるうちは良かったが、さて日本の今昔や文化を問われたときに、胸を張って応えられるだろうか。伝統は守るだけではもたない。綾さんは、着物とハープをベースに、海外への渡航や挑戦をためらうことなく、今後もあらゆるものとコラボして行きたいという。グローバリズムという言葉の前に、まずは行動で一石を投じる、こうした綾さんのような姿勢こそ、真のグローバリズムに通じるのではないだろうか。

Harpist AYA